研究資料

1920年代における武田千代三郎のアマチュアリズム観 — 大阪市立高等商業学校長時代の活動を中心に —¹

根 本 想 (早稲田大学大学院スポーツ科学研究科)²
友 添 秀 則 (早稲田大学スポーツ科学学術院)³
小 野 雄 大 (早稲田大学スポーツ科学学術院)⁴

Abstract

The purpose of this study was to clarify the thought of “Amateurism” developed during the 1920s by Chiyosaburo Takeda (1867–1932). In particular, we focused on his activities as the principal of Osaka higher commercial school.

Our study focused on four points: 1) Clarifying Takeda’s awareness of the problems of college sports in the 1920s through the examination of “GAKUSEIUNDOTORISHIMARIRON”; 2) Clarifying Takeda’s ideal of Amateur rules through the examination of “UNDOKYOSHIKYOKAIKENSHORUISAN”; 3) Clarifying Takeda’s ideal of amateur athlete through the examination of the “Athletic Clubs Rules for Athlete Selection.” 4) Clarifying how students reacted to the “Athletic Clubs Rules for Athlete Selection.”

Our conclusions were as follows: Takeda asserted that sports have educational value, and that students should aim to succeed in both academics and sports activities. When students could not achieve the appropriate balance between the two, Takeda removed them from athletic clubs according to the “Athletic Clubs Rules for Athlete Selection.” Consequently, these rules were perceived negatively by students, who could not understand Takeda’s belief that sports have educational value. On the other hand, a student named Taniyama insisted on improving the “Athletic Clubs Rules for Athlete Selection” because he agreed with Takeda’s thoughts.

Our study revealed that Takeda removed students from athletic clubs at Osaka higher commercial school who could not balance both academics and sports. Therefore, our discussion suggests the necessity of reconsidering the person of Takeda, who is perceived as a representative advocate of the traditionally class-based discriminatory concept of “Amateurism.”

¹ A study of the thought of amateurism by Chiyosaburo Takeda in the 1920s: Focusing on his activities at Osaka higher commercial school

² Sou NEMOTO, Graduate School of Sport Sciences, Waseda University, 2-579-15 Mikajima, Tokorozawa, Saitama 359-1192, Japan

³ Hidenori TOMOZOE, Faculty of Sport Sciences, Waseda University, 2-579-15 Mikajima, Tokorozawa, Saitama 359-1192, Japan

⁴ Yuta ONO, Faculty of Sport Sciences, Waseda University, 2-579-15 Mikajima, Tokorozawa, Saitama 359-1192, Japan

Keywords: College Sports, Dainippon Taiiku Kyokai-The Japan Amateur Athletic Association, Sportsmanship

キーワード：学生スポーツ，大日本体育協会，スポーツマンシップ

1. 緒言

日本において「近代スポーツを支える中心的なスポーツ思想であつた」¹⁾アマチュアリズムはどのように受容されたのだろうか。この問いに答えることは、現在の日本のスポーツ観を理解していく上での基礎的な作業になり得ると考えられる。なぜならば、内海²⁾も指摘するように、アマチュアリズムは現在のスポーツ観を未だに潜在的に規定している部分があるからである。この指摘は、アマチュアリズムが課題としてきた〈「スポーツの商業主義化」という問題〉が、——歴史的文脈は異なるものの——ドーピング、八百長、違法賭博といった問題が生じている現在のスポーツ界においてもなお問われ続けていることから首肯されるであろう。

日本におけるアマチュアリズムに関する先行研究を確認すると、日本におけるアマチュアリズム受容の初発の時期は、「戦前期の日本のスポーツ統括組織」³⁾であつた大日本体育協会（以下「大体協」）によって競技者資格が作成された1920年前後であるとされている。そして、大体協が競技者資格によって、人力車夫など、脚力を用いる職業に就いた労働者を競技会から排除したという歴史的事実から、当時のアマチュアリズム観がエリート意識を多分に反映した階級差別的なものであつたと指摘されてきた⁴⁾。その際、当時大体協の副会長を務めていた武田千代三郎（以下「武田」）のアマチュアリズム観が、大体協によるエリート支配意識の証左として批判的とされてきた。

つまり、本稿の研究対象である武田千代三郎という人物は、日本におけるアマチュアリズム

受容を語る上での代表的人物として位置づけられてきたことが読み取れる。しかしながら、日本におけるアマチュアリズムに関する先行研究では、武田自身のアマチュアリズム観の検討については質・量ともに不十分であつたと考えられる。なぜならば、日本におけるアマチュアリズムに関する先行研究では、武田のアマチュアリズム観を直接の研究対象とはしておらず、武田のアマチュアリズム観を解明するために扱った資料も1922（大正11）年に大体協機関誌『アスレチックス』誌上に掲載された「アマチュアリズム」という論稿1点のみを参照しているにすぎないからである。

実際に武田の論稿「アマチュアリズム」を確認すると、武田は、人力車夫など、脚力を用いる職業に就いた労働者だけでなく、セミプロ化した学生競技者についてもアマチュアから排除するべきであるとする見解を述べている。川本⁵⁾の見立てでは、武田がセミプロ化した学生競技者をアマチュアから排除するべきであると判断していた理由は、学生紳士のものたるべきスポーツに労働者が「夜間学生」として競技会に参入してくる可能性を排除することにあつたとし、結局それは「エリートの階級意識」の現れ以外の何物でもないと指摘している。

しかしながら、川本⁵⁾をはじめとする日本におけるアマチュアリズムに関する先行研究では、「武田自身が学生スポーツそのものについていかに思考していたのか」という点については検討を加えていない。そのため、武田がセミプロ化した学生競技者をアマチュアから排除するべきであると主張した理由が、労働者の競技会への参入を防ぐという点のみであつたのかにつ

いては不明である。したがって、武田のアマチュアリズム観には、セミプロ化した学生競技者をアマチュアから排除しようとした根拠について詳細な検討を行うことによって、再解釈の余地が残されているといえよう。

というのも、実際に武田は、論稿「アマチュアリズム」を書いた1920年前後の時期において、大阪市立高等商業学校（以下「大阪高商」）の校長として、学生スポーツとの直接的な関わりをもっていただからである。そして、武田は1925（大正14）年には、大阪高商校友会から『学生運動取締論』⁶や、『運動競技士協会憲章類纂』⁷といった著作を刊行し、彼にとっての学生スポーツに対する問題意識や理想的な競技者資格のあり方について記述している。さらに、彼は大阪高商校長として、実際に運動部の競技者資格である「校友会各部選手選定に関する内規」を作成していた。これらの点に鑑みると、武田は、アマチュアリズムによって、従来の研究で指摘されてきた労働者だけでなく、学問と競技との両立ができていない学生競技者も競技会から排除していた可能性は十分に考えられるだろう。

以上、日本におけるアマチュアリズムに関する先行研究の検討を行ってきたが、日本におけるアマチュアリズムの受容の実態を解明する上で、まずは、対象時期をアマチュアリズム受容の初発の時期である1920年前後に設定する必要があることが確認できた。そして、本稿では、先行研究で扱われていながらも、十分な検討が行われてこなかった武田の大阪高商校長時代の活動に着目し、彼のアマチュアリズム観を検討していく。なぜならば、武田が大阪高商校長時に作成した運動部の競技者資格の検討を通して、彼が、セミプロ化した学生競技者をアマチュア競技者から排除しようとした根拠について明らかにしていくことによって、先行研究において多く指摘されてきた階級差別的なアマチュアリズム観とは異なる側面が見出せる可能性があ

るからである。

次に、武田を直接の研究対象として分析を行った研究を確認していく。阿部^{8・9}は、武田に影響を与えたとみられる同時代の他の複数の論者の言説も丹念に分析しながら、武田の1900（ゼロ）年代の代表的著作である『理論実験競技運動』¹⁰における「競技道」という概念について緻密で内在的な解釈を試みた。その結果、武田の「競技道」が重層的、複合的な性格を持っていたことが明らかにされた。阿部⁹は、「武田の場合、アマチュアリズムとは、あらゆるものから独立し得る、中立的なりベラリズムというよりも、より倫理的な非物質主義に傾倒するものであった。その非物質主義こそが、『競技運動』や『スポーツ』に道徳的光沢をもたらし、それらの活動の教育的価値を高め、高次な手段性を獲得させるものであった」¹¹として、武田にとってアマチュアリズムが、「人間形成の手段としてのスポーツ」という価値体系の中で道具的価値を有するものとして位置づけられることを示唆している。阿部の指摘は、日本におけるアマチュアリズムを対象とした先行研究において指摘されてきた、1920年前後の武田の階級差別的なアマチュアリズム観とは異なるものであり、本稿にとって大きな示唆を与え得る研究として位置づけられる。

しかしながら、阿部は、武田が1900（ゼロ）年代に確立した「競技道」概念の分析を中心に課題に据えていたため、武田のアマチュアリズム観を直接の研究対象としているわけではない。また、本稿の対象時期となる1920年前後の時期に対する分析は十分とはいえない。実際に阿部が主な対象時期として設定した1900（ゼロ）年代には、大体協も設立されておらず、武田自身が「アマチュア」や「アマチュアリズム」という言葉を用いることもほとんどなかった。そこで、本稿は、阿部が示唆した、「人間形成の手段としてのスポーツ」という価値体系の中で道具的価値を有するものとして位置づけられ

た武田のアマチュアリズム観が、1920年前後においていかに展開していったのか、といった点についても注視していく。

以上より、本稿は、先行研究において検討されることがなかった、武田の大阪高商校長時代の活動に着目し、1920年前後における武田のアマチュアリズム観の内実を明らかにすることを目的とする。本稿の課題は、以下の4点である。(1)『学生運動取締論』にみられる武田の学生スポーツに対する問題意識を明確にする。(2)『運動競士協会憲章類纂』にみられる武田の競技者資格の理想的なあり方を明確にする。(3)大阪市立高等商業学校の運動部の競技者資格である「校友会各部選手選定に関する内規」の検討から、武田にとってのアマチュア競技者のあるべき姿を明確にする。(4)「校友会各部選手選定に関する内規」に対する学生の反応を明確にする。以上の検討によって、本稿は、日本におけるアマチュアリズム受容の実態の解明に新たな示唆を与え得るものとなるだろう。

2. 『学校運動取締論』にみられる武田千代三郎の学生スポーツに対する問題意識

本節では、大阪高商校友会から刊行された武田の著作『学生運動取締論』（以下『取締論』）の分析を通して、彼の学生スポーツに対する問題意識について明らかにしていく。

『取締論』は第1篇と第2篇に分かれた約60頁の著作である。本節では、武田の学生スポーツに対する問題意識を解明していくことに主眼を置いているため、特に第1篇「運動界宿弊」に着目して検討を加えていく。以下では、武田が「運動界宿弊」として主に取り上げていた、「貪汚行為」、「不正行為」、「怠業」の3点について順に説明していく。

第1の「貪汚行為」について、武田は、「運動を以て利得の具となさんとす一切の行為」¹²⁾

を指すという。具体的に武田は、賞金や寄付、賭博、宣伝広告のために競技することを固く禁じている。そして、武田は、この弊害を戒めている。「国際運動競士連盟規則」の「競士資格」や「英米運動競士連合協会憲章」の「競士定義」を参照するべきであると述べている。つまり、武田は、イギリスやアメリカの競技者資格を根拠として、賞金や賭博等スポーツによって金銭的利益を得ようとする行為を禁じることを主張している。このように、武田は、『取締論』において、たびたび、「国際運動競士連盟規則」や「英米運動競士連合協会憲章」の条項を参照すべきであると指摘している。実際に武田は、『取締論』と同年の1925（大正14）年に大阪高商校友会から『運動競士協会憲章類纂』（以下「憲章類纂」）⁷⁾と題した、「国際運動競士連盟規則」や「英米運動競士連合協会憲章」を翻訳、解説した著書を刊行している。『憲章類纂』において武田がイギリスやアメリカの競技者資格についていかなる解説を加えたのかについては、次節にて詳細に検討していく。

第2の「不正虚偽」について、武田は、競技会に出場する際に、職業や年齢を偽ったり、氏名を詐称したりする行為を挙げている。そして、このような「不正虚偽」が生じる要因の1つとして、日本の「競技申込書に複雑なる記入を為すを要する等の規定」¹³⁾がないことを指摘した。1925（大正14）年当時の大体協が独自の競技者資格を持たなくなっていた点¹⁴⁾に鑑みても、大体協の競技者資格の不徹底に対する批判も『取締論』には含まれていたと考えられよう。つまり、ここにおいても、武田は競技者資格の徹底の必要性を説いていたことが見て取れる。

第3の「怠業」について、武田は、学校での競技は「戦争」とは異なると述べる。そして、学生が、学校を代表して競技をすることは、「軍人が国家の為に骨を砂礫に曝すと同一視すべきに非らず」¹⁵⁾という。このように、「競技」と「戦争」を区別する視点は、1904（明治37）年に

刊行された武田の著作『理論実験競技運動』においてすでにみられたものであった。武田は、当該著作において、「競技」と「戦争」の違いについて、以下のように述べている。

競技は利得を争ふものではない、権勢を争ふものでもない。彼此の所謂不可勝を比較して其の優劣を競ひ、互に對手を他山の石となして我が實力を研鑽し、以て相樂しむを本旨とするものである。・・・(中略)・・・戦争は其の目的勝を制するに在るから、其の手段は成るべく奇、正、虚実、誑詐、狡猾を尊び、巧に敵の寝首を搔くを戦上手として居るけれども、競技に所謂競争は全く之に反して、一から十迄「フェアプレイ」に依らなければならぬ。・・・(中略)・・・競技場に上る者は、己れの人たるを忘れて、神の弟子とでもなつた心持で居なくてはならぬことである¹⁶⁾。

ここでの「互に對手を他山の石となして我が實力を研鑽し」という表現は、『詩経』にみられる、「他山の石以て玉を攻むべし」¹⁷⁾という訓と同様の意味で用いられたのではないかと推察される。平川¹⁸⁾によると、この訓は、よその山から得た粗悪な石でも我が玉(智徳)を磨くの用に用いることができるという意味であるという。つまり、ここから、武田にとって、スポーツとは、智徳錬磨の手段であり、勝敗に関係なく、学ぶものがあると考えた立場であったということが看取できよう。換言すると、武田にとって、スポーツは、いわゆる勝利至上主義¹⁹⁾を否定して「フェアプレイ」や自分のベストを相手と試し合うものとして、「戦争」は徹底した勝利至上主義を貫くものとして捉えられていたといえよう。つまり、学業を排してまで競技に熱中する学生や指導者のように、スポーツを行うにあたって勝利至上主義に陥ることを武田は、強く戒めていたと考えられる。

そして、武田は、『取締論』の第1篇の結び

として、以下のように述べている。

我国未だ英米の競士協会の如き有力なる主宰団体なく、我か大日本体育協会等の如きは、其の實力未だ遠く英米の協会に及ばず、其の漸くに勢力を得て、英米協会が恰も国家の一行政府たるが如くならんことは、到底此の處數年間に期すべからざれば、学校内の運動は当分之を文部省の直接監督に属せしめ、大日本体育協会が愈々實力を得て全国学校運動を指揮監督するを得るに至るを待ち、始めて自治を許すを以て最も安全にして有効なる政策なりと確信するもの也²⁰⁾。

この記述からも、武田が、「運動界宿弊」に対処していくための具体的な方法として、イギリスやアメリカの「競士協会」に倣い、「一行政府」であるかのように「指揮監督」していく必要性を主張していることが読み取れる。

以上、『取締論』にみられる武田の学生スポーツに対する問題意識について検討してきた。本節における検討から、武田が、学業を排してまで競技に熱中する学生や指導者のように、スポーツを行うにあたって勝利至上主義に陥ることを強く戒めていた点、そのためにイギリスやアメリカの「競士協会」のような競技者資格によって「指揮監督」を行っていく必要性を主張していた点が明らかになった。

3. 『運動競士協会憲章類纂』にみられる武田千代三郎の理想の競技者資格

本節では、武田がイギリスやアメリカの「競士協会」の競技者資格を翻訳解説した、『運動競士協会憲章類纂』を参照し、彼が「運動界宿弊」を「指揮監督」していく際に、理想とした競技者資格の内実について検討していく。

『憲章類纂』は、1925(大正14)年6月に大阪高商校友会より、非売品として刊行された。

大阪高商校友会による序文によると、「本書は本校校長（武田）が、国際陸上運動及び英米水陸運動競士協会等の憲章並に其の施行細則中、一般教育家及び学生等に、教育手段としての運動の何たるかを会得せしむるの指針たる可き條項を抜き、之を編輯翻訳したる」²¹⁾ものであるという。ここから、武田が、英米を中心とした競技者資格の翻訳を通して、教育としてのスポーツを会得する指針を示そうとしていることが読み取れる。また、校友会による序文には、「我国の教育が従来智育に偏して徳性の陶冶を顧みざるの宿弊を拯ふの一助たる可きは、毫も疑を容れざる所也」²²⁾という危機意識が述べられている。

では、武田自身によって書かれた自序には、何が書かれているのだろうか。以下、その一部を引用する。

運動を以て学校教育の手段と為し、民風進歩の媒助たらしめんとする者須く先づ運動家の言動を誡めて其の墮落を防ぎ、競技挙行の準規を厳にして悪弊の発生を遏め、而して後理法を後述し実技を指授す可し。…(中略)…国際競士連盟規約に関するものは、友人岸法学博士清一君が、大正十三年拂国巴里に於ける国際競技大会臨み、帰朝に際して齎し來れるものを借覽して之を追補せるものに属す²³⁾。

武田の自序からも、彼が、「教育の手段」としてスポーツを捉えていることが確認できる。「教育²⁴⁾」の手段、としてのスポーツ、という考え方は、阿部^{8, 9)}も指摘しているように、武田の「競技道」概念から連続したものであった。そして、武田は、前節でも明らかにされたように、運動界の悪弊を抑えるために、競技者資格を厳格にする必要性を示唆している。また、国際的な競技者資格については、1924（大正13）年の第8回オリンピック・パリ大会から帰朝し、当時大体協会会長を務めた岸清一から借覽したも

のであるため、翻訳当時において、最新の競技者資格であったことが確認できる。

では、非売品として刊行した、『憲章類纂』は誰のために書かれ、誰に読まれたのだろうか。武田は、1925（大正14）年7月に発行された、大阪高商校友会誌『商海』の臨時増刊号の序文、「英米其の他に於ける運動の監督指導」²⁵⁾に以下のような記述をしている。

数日前に英米水陸運動協会の諸規則を編纂しました運動競士の心得とも申す可き書物を学生一同に配布して其の教養を資くるの一助と致しました²⁶⁾

ここから、武田が、『憲章類纂』を大阪高商の学生一同に配布していたことが確認できる。さらに「英米其の他に於ける運動の監督指導」では、『憲章類纂』の解説を行っている。そこで、以下では、「英米其の他に於ける運動の監督指導」を参照しつつ、『憲章類纂』の要点について概観し、そこから、武田の理想の競技者資格がいかなるものであったのかについて検討していく。

まず、『憲章類纂』のタイトルにも付されている、「競士」という言葉を、武田はどのように定義していたのだろうか。武田は、「運動家たる可き者は競士即ち Amateur（アマチュア）でなくてはならぬ」²⁷⁾という。そして、「競士」の定義を以下のように示す。

競士とは運動に伴ふ歓楽を享受し、又其の肉体精神及び社交上に及ぼす可き有益なる効果を收得するを唯一の目的として、之を好愛するの外他意なき者を云ふ²⁸⁾

武田が示した「競士」の定義には、「歓楽を享受」＝「娯楽」、といった要素や、「社交」といった要素がみられる。では、上述した武田の「競士」の定義は何に依拠していたのだろうか。

武田によると、上述の「競士」の定義は、「米
国競士協会で定めた定義で、一番模範的だと思
はれますから、此に之を借用致したのであります」²⁹⁾と述べている。

さて、武田は、「英米其の他に於ける運動の
監督指導」において、イギリスやアメリカの競
技者資格をどのように捉えていたのだろうか。
武田²⁵⁾によると、イギリスやアメリカでは、
スポーツの指導監督は民間有志の労力や出費に
よって、国家とは別の手によって奨励、発達し
ていったと述べる。しかしながら、武田は、「英
米二国に於ける運動の指導監督は、恰も運動以
外の他の事柄が各種の公法私法に據り政府の行
政機関に依りて監督せられて居るのと同様、一
定の嚴重なる法規に據りて其の主宰団体即ち運
動界の政府とも云ふ可き絶対権力に依りて支配
されて居ると云ふ一事であります」³⁰⁾と述べる。
さらに、武田²⁵⁾は、イギリスやアメリカの競
技者資格は、国家の憲法、行政法、民法、商法、
訴訟法、その他の法律と同様の効力を、民間の
組織が有していると述べる。それどころか、英
米の競技者資格は、「国家の法律も及ばぬ程の
拘束監督の實を挙げている」³¹⁾と評している。
このように、武田にとって、「運動家として其
の道を楽しまうとする人は、いやでも此の私制
法律を遵奉して国内の運動主宰団体の獨宰權に
服従しなければならぬやうになつて居る」³²⁾の
であった。

では、なぜイギリスやアメリカでは、このよ
うな厳格な競技者資格を設けたのだろうか。武
田は、その理由の1つとして、「運動界より利慾、
破廉恥、不品行、卑猥等の諸害惡を排除し、以
て運動の神聖を保ち、国民の心身を鍛鍊」³³⁾す
るためであると私見を述べる。

一方で、日本の現状について、武田はどのよ
うに捉えていたのだろうか。武田²⁵⁾は、日本
において、スポーツが盛んになってきたことに
言及し、驚きと喜びを示している。しかしなが
ら、すぐに、「欧米の先進国の夫れと較べて丸

で小供の真似事としか思はれませぬ」³⁴⁾と指摘
する。そして、日本のスポーツ界の現状につい
て、紀律、節制、統一、約束がないため、「幾億
の星群が宇宙間に乱交して居るやうな有様」³⁵⁾
であると述べる。それは結局日本人が、スポー
ツに対する理解に乏しいからだと指摘し、以下
のように続ける。

欧米文物の表面のみを見て、深く其の内部
を洞察するの明を缺いて居る爲で即ち換言す
れば運動の監督指導に関する無知の致す所と
此の私は観て居るのであります。外国の風を
学なら先づ代一に事物の精神を採入れて貰ひ
たいもので、無暗に物真似を事とするのは深
く今しむ可き事だろうと考へられ歟³⁶⁾。

つまり、武田は、スポーツという「異文化」
の受容に際して、具体的で可視化できるような
「表面」ではなく、抽象的である「精神」こそ
を第一に取り入れるべきであると主張している
のである。しかし、文化の伝播は、友添による
と「技術的な側面は容易に受容されるが、思想
や心情等の観念的な側面は受容されにくい」³⁷⁾
という。つまり、「具体的で可視性をもった事
物や事象は比較的容易に伝わるが、抽象的で目
で見ることができないものは伝えにくいし、ま
た伝わりにくい」³⁸⁾のである。これらの友添の
指摘からも、スポーツという「異文化」を受容
していく際に、武田が述べたような「精神」を
第一に受容することは困難であると考えられ
る。では、はたして武田自身は、スポーツとい
う「異文化」の「精神」までをも受容できてい
たのだろうか。

武田は、論稿「英米其の他に於ける運動の監
督指導」において、日本のスポーツ界の現状が、
「無方針、無秩序、無統一、無監督」³⁹⁾である
のに対し、イギリスやアメリカでは、「国家の
政府其の物の如き有力なる機関の権力に依り、
国法と均しき嚴重なる法規に據りて覇束せられ

て居ると申す事丈けは」⁴⁰⁾ 読者に理解してもらえたことを信じている、と述べている。つまり、武田が「英米其の他に於ける運動の監督指導」において最低限伝えたかった内容は、まさに、競技者資格という可視化し得るものをイギリスやアメリカと同様に厳格にしていくことであったといえよう。この点は先述した、「異文化」を受容する際に、抽象的で目で見ることができない「精神」を第一に受容すべきであるという武田の主張と矛盾が生じているといわざるを得ない。はたして武田は、19世紀のイギリスのパブリックスクールにおいて、スポーツのルールを成文化していく際に、「民主化あるいは自由・平等の実現への努力」⁴¹⁾ という「精神」が存在していたことを理解していたのだろうか。また、「イギリス、アメリカのスポーツ団体がアマチュアリズムの確立という課題に直面しながらも、なお政治権力からの独立ということを大切にしてきたということ、このような立場を堅持しながらそれぞれのスポーツ団体内部における合議と合意を重視していたということ、さらには、このような『雰囲気や気風』の背景にあってそれを支えていた自由・平等思想」⁴²⁾ を理解していたのだろうか。「英米其の他に於ける運動の監督指導」をみる限りでは、答えは否であろう。なぜなら、武田は、「自由・平等の実現」ではなく、「無方針、無秩序、無統一、無監督」³⁹⁾ という現状を克服するために可視化できる競技者資格を厳格にする必要性を訴えていたからである。では、武田は大阪高商において、具体的にいかなる競技者資格を制定していったのだろうか。次節にて検討していく。

4. 「校友会各部選手選定に関する内規」にみられる武田千代三郎にとってのアマチュア競技者のあるべき姿

本節では、大阪高商における運動部の競技者資格として、武田が1920（大正9）年に制定し

た「校友会各部選手選定に関する内規」（以下「内規」）を対象として、武田にとってのアマチュア競技者のあるべき姿について検討していく。その糸口として本節では、大阪高商の校友会誌である『商海』に寄稿した、武田の論稿「運動家」⁴³⁾ を主な分析対象とする。なぜなら、当該論稿において、武田は、「内規」を制定した際に、武田の中に基盤として存在した「精神」⁴⁴⁾ について述べているからである。そこで、まずは、武田の論稿「運動家」の概要についてみていく。

武田⁴³⁾ は、論稿「運動家」において、まず「運動家の留意すべき教訓」の概要について略述した。そこでの1つの特徴として、武田が「アマチュア」と「プロフェッショナル」を対置させている点が挙げられる。そこでは「眞の運動家」として「学業の餘暇屋外の靈氣に觸れ、眞の智情意を修練」⁴⁵⁾ した「良学徒」のことを「アマチュア」として位置づけている。一方で「プロフェッショナル」は、「運動の餘暇を以て筆硯に親しまんと」⁴⁶⁾ する者として位置づけられている。つまり、武田の論稿「運動家」において、武田は本業を学業に求める者を「アマチュア」、本業をスポーツに求める者を「プロフェッショナル」として定義しているといえよう。

また、武田⁴³⁾ は、スポーツに熟達し必要な体力を得るためには、無益に時間や体力を消耗しない、「正しき練習法」を用いる必要があると述べている。しかし、多くの運動家は試合によって体力や技術を鍛えることに集中してしまうため、「正しき練習法」の実践がされず“Stale sportsmen”や“Stupid students”になってしまうという。ここでの武田の問題意識は、「戦に先ちて兵を練るは兵家の常道也、世の多くの運動家、戦に依りて兵を練らんとす、謝れりと謂ふべし」⁴⁷⁾ という点に要約される。その他にも武田⁴³⁾ は、運動家の飲食は単純淡味なるものを善しとしたり、体力維持の必要条件として、便利な交通機関を使わずに自分の足で移動する

ことを奨励したりしている⁴⁸⁾。

そして、「運動家は有形物質的の賞品賞牌を榮とすることなく、運動競技が不知不識の間に、吾人に賞與する無形の徳性を、自己の心身に鏤刻せしめ、これを以て終生去るべからざる至貴至重の財寶とするの大志あるを要す」⁴⁹⁾とし、「運動家の留意すべき教訓」をまとめている。

以上、武田の論稿「運動家」における「運動家の留意すべき教訓」を概観してきた。そこから、武田が、質素儉約を重んじ、勝利至上主義に陥ることなく、本業としての学業に取り組む人物を理想的なアマチュア競技者として捉えていたと考えられよう。

「運動家の留意すべき教訓」を述べた後、武田⁴³⁾は、「真正なる運動の進歩を阻害するもの」を列挙した。そこで武田は具体的に表1に示される6つのタイプの人物を挙げた⁵⁰⁾。

そして、武田は以上、6つのタイプの「真正なる運動の進歩を阻害するもの」に共通する問題として、「青年の訓育」が誤っている点を指摘した⁵¹⁾。つまり、武田の論稿「運動家」においても、武田は、あくまでもスポーツは「教育」のための手段である、という武田の「競技道」概念から一貫して文字として表されてきた考えを保持していたと考えられる。

以上、校友会誌『商海』における武田の論稿「運動家」を概観し、「内規」制定の根拠となる「精神」⁴⁴⁾を確認してきた。そこでは特に、「競技道」概念との連続として「教育」の手段としてスポーツを捉え、質素儉約を重んじ、勝利至上主義に陥ることなく、本業としての学業に取り組む人物を理想的なアマチュア競技者として捉えていた点が明らかになった。

続いて、上述の「精神」⁴⁴⁾を体現するための競技者資格が具体的にどのような形となったのか、「内規」を概観する。武田の論稿「運動家」の文末に記載された「内規」は表2の通りである⁵²⁾。

第1条において、学期試験と学年試験の両方で60点以上の平均点を出すことを運動部の選手としての参加条件にしていたり、第3条において、競技に熱中しすぎることを防ぐためか、対外競技の出場回数も制限されていたりする点から、「内規」の条文においても、武田が学生の本分を学業にしていることが読み取れる。また、「会長ノ認可」を求める条項が多いことから、武田自身が選手選定に際し、決定権を握っていたことが読み取れる。そのほかにも、第7条から第11条において、スポーツと金銭との結びつきを善とせず、質素儉約を重んじる「精神」⁴⁴⁾が「内規」においても看取できる。

表1 「真正なる運動の進歩を阻害する」6つの人物

「真正なる運動の進歩を阻害するもの」
<p>① 人と人、人と獣との闘いをみることを無情の快楽とする者</p> <p>② 優秀な選手を招待して盛大な宴会を開く者</p> <p>③ 選手の言われるがままに練習費を与え、選手の墮落に導く者</p> <p>④ 運動や生理に関する研究のために青少年の犠牲を顧みない者</p> <p>⑤ 運動奨励と称し、自家営業の広告として運動を利用する者</p> <p>⑥ 学校や運動団体において常勝の選手がいないことを恥と考える者</p>

(「運動家」(武田, 1920)⁴³⁾より作成)

表2 「校友会各部選手選定に関する内規」

校友会各部選手選定に関する内規 大正九年四月十六日議定	
第一條	選手たるを得る者は学年試験及学期試験に於て六十点以上の平均点を得たる者に限る
第二條	選手は其の都度副会長及び学生課長たる部長の銓衡を経会長之れを選定す
第三條	選手に選定せられたる者の對外競技に出場し得るは一学年間特定の一技一回限りとし 但し特に会長の認可を得たる者は此の限りに非ず
第四條	試験前の若干日数間は對外競技に加わること許さず 但し特別の場合に於ては特に会長の認可を経て参加せしむることあるべし
第五條	専門学校以上を相手とする競技又は会長の認可する団体の主催する競技に非ざれば参加するを得ず
第六條	長期の休業中と雖も特に会長の認可を得たる場合の外往復五日以上又は三日以上滞在を要する競技に参加するを許さず 但し近距離にして日々往復し得る場合は此限に非らず
第七條	選手の旅費は各部予算の範囲内に於て其幾分を補助す
第八條	選手の競技用被服は本会備品を貸与するの外総て自辨とす
第九條	選手派遣費に充つる爲校の内外を問はず猥りに寄附金を募集することを許さず 但し特に必要と認むる時は会長の認可を受くべし
第十條	選手は競技主催者より旅費其他の補助を受くことを得ず
第十一條	第一項 選手に非ざるものと雖も会長の認可を経ずして運動の指導者又は師範となることを得ず 第二項 前項の認可を受けたる者と雖も往復滞在の賞費を除くの外何等の名義を以てするも金品の謝体を受くことを得ず 第三項 長期の休業中自己出身の学校に於て指導教練の依頼に応ずる場合に於ては本條第一項を適用せず

以上

(「運動家」(武田, 1920)⁴³⁾より作成)

以上、武田が大阪高商で制定した競技者資格である、「内規」に着目して、武田にとってのアマチュア競技者のあるべき姿について検討してきた。まずは、「内規」制定の根拠となる「精神」について確認した。その結果、武田が、「教育」の手段としてスポーツを捉え、質素儉約を重んじ、勝利至上主義に陥ることなく、本業としての学業に取り組む人物を理想的なアマチュア競技者として捉えていた点が明らかになった。次に、「内規」の条文を確認した。その結果、先にみてきたように、本業としての学業の重視という点については体现されていたと考えられる。しかしながら、武田が1900（ゼロ）年代の時点から「競技道」概念の中核として位置づけてきた「教育」の手段としてのスポーツという考えについては、「内規」には十分に反映されていなかったことが見て取れた。つまり、ここから、武田にとってのアマチュア競技者のあるべき姿が、「内規」という競技者資格の条文にもれなく反映していたわけではないことが示

唆されよう。

一般的に考えてみても、「教育」としてのスポーツという「精神」⁴⁴⁾は、「競技者資格」という形で体现できる性格のものではないと考えられる。武田はこの点について自覚的であったのだろうか。さらには、「内規」を通して武田によって選定された学生たちが、武田の述べてきた「教育」の手段としてのスポーツを十分に理解できたのだろうか。はたして、この競技者資格は運動部員たちにどのように受け取られたのであろうか。次節では、その一例として、校友会誌『商海』上の論稿において、一学生によってなされた競技者資格改訂のための陳情を概観していく。

5. 一学生による「校友会各部選手選定に関する内規」の評価

本節では、武田の「精神」⁴⁴⁾が十分には反映されていなかったと考えられる「内規」に対し、

学生がいかなる反応を示したのかについて検討していく。

そこで、本節では、『商海』において「アマチュア運動家に関する一私見—武田校友会々長のアスレチック誌上に於けるアマチュアリズムを読みて—」⁵³⁾というタイトルの論稿を寄稿した、谷山良一（以下「谷山」）⁵⁴⁾という人物に着目する。なぜならば、谷山⁵³⁾は論稿上において、武田の「アマチュアリズム」概念や、「内規」の改正について主張しているからである。そのため、本節で明らかになるのは、あくまでも、武田の「アマチュアリズム」概念や「内規」に対する学生の反応の一事例であるということに先に断わっておく⁵⁵⁾。以下では、谷山の論稿「アマチュア運動家に関する一私見」の概要について概観していく。

谷山の論稿「アマチュア運動家に関する一私見」は、以下の構成で展開されている。

- 一、はしがき
- 二、アマチュア、アスレートの意味
- 三、学生運動家とアマチュア、アスレート
- 四、先生のアマチュア、アスレートに對される態度
- 五、所謂点数制限問題に對する一私見

谷山⁵³⁾は、はしがきにおいて、以下のよう
な記述をしている。

先生のアマチュアリズムは未定稿である。故に其の完成を待たなければ其の御説を充分に理解する事が出来ないのは勿論であるが、幸福にも常に先生の警咳に接することの出来る私には、先生がアマチュアリズムを書かれた動機並びに其の御説の内容を大概推察する事が出来るのである。不幸にも先生の御理想の我が高商学生諸兄に徹底されて居ない現状に鑑み、直接運動部に關係を持つ私は是非とも先生のアマチュアリズムを学生全体に

普及さす必要ありと信じたので、敢て商海誌上の貴重なる誌面を借りて、先生のアマチュアリズムを説き、進んで一大阪高商学生として先生のアマチュア、アスレートに對される態度、重に實際問題として構内の所謂選手權問題に對して少々卑見を述べてみたいと思ふ⁵⁶⁾。

ここから谷山が武田の「アマチュアリズム」概念について賛同している点、その一方で武田の「理想」が大阪高商の学生たちに徹底されていない点、そのため武田の「アマチュアリズム」概念を大阪高商生に普及させる必要を感じている点が読み取れる。

しかしながら、論稿「アマチュア運動家に関する一私見」において、谷山は、武田の「アマチュアリズム」概念を無批判に賞賛しているわけではない。そこで、まずは谷山が武田の「アマチュアリズム」概念をいかに評価しているのかについて概観する。

谷山は武田の「学生は須く学生で、学業第一運動第二であらねばなれぬ」⁵⁷⁾という「根本思想」においては賛同しながらも、単純に「なまけ書生」に運動を禁じて、「彼等の姿を運動場から除き去ってしまふ事」⁵⁸⁾については否定的に捉えている。その根拠として、谷山⁵³⁾は、優秀な技術者である可能性を持った「なまけ書生」の運動を禁止すると、一般の学生も刺激を失い運動から離れていってしまう点を指摘している。そして、谷山は、武田に対し、「何よりも先に此の学校でもつと運動を積極的に奨励する法を講じて頂きたい」⁵⁹⁾と述べる。

ここから、谷山は、武田に対し、「内規」によって、運動部員の取り締まりを強化するよりも、まずはより多くの学生に対してスポーツを経験させるための方法を提案していくことが重要であると主張しているといえよう。少なくとも、谷山は、武田の「アマチュアリズム」概念の理想や理念といった内容については賛同している

が、それを実現する方法に対しては否定していることがわかる。次に、谷山が「内規」に対して具体的にどのような改訂を求めていったのかについて確認していく。

谷山は「内規」について、武田に対し、第1条に記された点数制限に関する条項の全廃を訴えている。谷山⁵³⁾は、その根拠として以下の3点を示している。

1点目は、1学期の成績を偏重し、学年試験を無視している不公平さである。具体的には、大阪高商では、学期試験と学年試験の総合成績によって及落を決定するのにに対し、「内規」では、学期試験で平均点に到達しないだけで選手資格を1年間失い、学年試験の結果が如何であろうと選手権の復活が認められていない点である。

2点目は、競技会のレベルの向上により、「専門学校程度の選手として恥しからざらん爲にはどの競技とも少なくとも春のシーズン前より秋のシーズン終りまで普段の練習を要する」⁶⁰⁾ため、秋のシーズン直前の1学期試験で良い成績を修めるのが困難となってしまう点である。

3点目は、点数制限の条項によって選手資格を失った大阪高商生は1921(大正10)年に「全校生中約三割三分」、1922(大正11)年に「四割」いるため、特に団体競技の運動部において活動が成り立たなくなってしまう点である⁶¹⁾。

以上の3点が谷山⁵³⁾の点数制限に関する条項全廃の根拠である。ここからも、谷山は、武田のスポーツに対する理想や理念の内容については賛同しているが、それを実現する方法に対しては否定的に捉えていることが明らかになった。

6. まとめと今後の課題

本稿は、先行研究において検討されることがなかった、武田の大阪高商校長時代の活動に着目し、1920年前後における武田のアマチュアリズム観の内実を明らかにすることを目的とし

た。各節で明らかとなったことは以下の通りである。

第2節では、『取締論』にみられる武田の学生スポーツに対する問題意識について検討を行った。その結果、武田は、「教育」の手段としてのスポーツを理想とし、学業との両立ができない学生競技者を問題視していたことが読み取れた。この点は、彼が1900(ゼロ)年代に確立した「競技道」概念から一貫したものであったといえよう。一方で、その理念を実現する方法として武田が提案したものは、可視化できる厳格な競技者資格を設けることであった。

第3節では、『運動競士協会憲章類纂』にみられる武田の競技者資格の理想的なあり方について検討を行った。その結果、武田は、日本において競技者資格が十分に徹底していない点を問題視し、イギリスやアメリカのように、「国法に均しき」厳格な競技者資格を設けることを理想としていることが読み取れた。

第4節および第5節では、大阪市立高等商業学校の運動部の競技者資格である「校友会各部選手選定に関する内規」の条文の内容や理論的根拠と、「内規」に対する学生の反応について検討を行った。その結果、武田は、学業と運動部での活動が両立できない学生を問題視していた点が明らかになった。そして、「内規」という競技者資格を設けることによって、学業との両立ができない学生を運動部から排除していた点が明らかになった。さらに、谷山という一学生からは、武田の「教育」の手段としてスポーツを捉えるという理想や理念の内容については賛同しているが、他の学生には伝わっていなかった点、さらに武田の理想や理念を実現する方法である競技者資格に対しては否定的に捉えられていた点が明らかになった。つまり、武田の「教育」の手段としてのスポーツという、競技道から一貫して掲げてきた理念は、選手を排除する機能を果たした競技者資格を設けたことによって、学生たちに受け入れられなかったこ

とが明らかになったといえよう。

以上、本稿での考察から、武田は大阪高商校長として、「内規」を通じて、あくまでも「人間形成の手段としてのスポーツ」という価値体系を基準として、そこから逸脱した、学業とスポーツの両立ができない学生を競技から排除していたことが明らかになった。つまり、大体協の競技者資格によって排除された、脚力を用いる職業に就いた労働者は、武田の理想としたアマチュア競技者から逸脱するもののうちの一部であったことが指摘できよう。

また、断言することはできないが、本稿の考察から、武田にとっては、脚力を用いる職業に就いた労働者も、学業とスポーツの両立ができない学生と同様に「人間形成の手段としてのスポーツ」という価値体系から逸脱した存在であった可能性が示唆される。この可能性は、従来階級差別的なアマチュアリズムを主張した代表的人物として捉えられてきた武田像の再考をせまるものであると考える。というのも、今後のより詳細な検討によって、武田は、階級差別を至上の目的としてアマチュアリズムを理解したのではなく、あくまでも「人間形成の手段としてのスポーツ」という価値体系の確立こそを至上の目的として、その価値体系の中においてアマチュアリズムなるものを理解しようとしていた、という可能性が導かれ得るからである。さらに、もし仮に、武田が「階級差別を至上の目的としないアマチュアリズム理解」をしていたとするならば、それは、日本におけるアマチュアリズム受容の実態についての従来の見解に対しても再考をせまるものとなる。

以上の点において、武田のアマチュアリズム観に関するより詳細な検討は、日本におけるアマチュアリズム受容の実態を解明していく際にも重要な課題となるだろう。それと同時に、先行研究で取り上げられることのなかった、武田以外の大体協役員のアマチュアリズム観についても比較検討を行い、日本におけるアマチュア

リズムの受容の実態について、より詳細な分析を進めていく必要があるだろう。

注および引用・参考文献

- ¹⁾ 菊幸一（2010）アマチュアリズムとプロフェッショナリズムをめぐる現代的課題。現代スポーツ評論 23。友添秀則編。東京、創文企画、p.92。傍点は筆者による。
- ²⁾ 内海和雄（2007）アマチュアリズム論 差別なきスポーツ理念の探求へ。東京、創文企画。
- ³⁾ 石坂友司（2007）日本のスポーツ界形成における象徴的権力構造に関する研究。筑波大学平成 18 年度博士論文、p.3。
- ⁴⁾ 川本信正（1969）アマチュアリズムという神話——貫した体協の“倫理”と差別思想一。朝日ジャーナル。11（17）、105-108。
中村敏雄（1977）近代スポーツ批判 新版。東京、三省堂。
中村敏雄（1981）スポーツの風土。東京、大修館書店。
藤田紀昭（1989）1922 年に成立した我が国のアマチュア規定に関する研究。徳島文理大学研究紀要。37、87-105。
- ⁵⁾ 川本（1969）同上論文。
- ⁶⁾ 武田千代三郎（1925a）学生運動取締論。大阪、大阪市立高等商業学校校友会。
- ⁷⁾ 大阪市立高等商業学校校友会編（1925）運動競士協会憲章類纂。大阪、大阪市立高等商業学校校友会。
- ⁸⁾ 阿部生雄（2002）武田千代三郎の「競技道」の系譜とその性格。筑波大学体育科学系紀要。25、31-48。
- ⁹⁾ 阿部生雄（2009）近代スポーツマンシップの誕生と成長。東京、筑波大学出版会、pp.257-303。
- ¹⁰⁾ 武田千代三郎（1904）理論実験競技運動。東京、博文館。
- ¹¹⁾ 阿部生雄（2009）前掲書、p.293。

- 12) 武田千代三郎 (1925a) 前掲書, p.2.
- 13) 同上書, p.6.
- 14) 大日本体育協会は, 第8回オリンピック・パリ大会の日本代表選手選考をめぐる学生競技者と対立し (いわゆる「13校問題」), 1925年に組織改造を余儀なくされ, 独自の競技者資格を持たなくなった. 以上の経緯については, 下記文献を参照されたい.
財団法人大日本体育協会編 (1936) 大日本体育協会史 上巻. 東京, 財団法人大日本体育協会, pp.24-33.
森川貞夫 (1973) 大日本体育協会「組織改造問題」の一考察. 日本体育大学紀要. 3, 11-24.
- 15) 武田千代三郎 (1925a) 前掲書, p.7.
- 16) 武田 (1904) 前掲書, p.619. 傍点は筆者による.
- 17) 『詩経』については, 下記文献を参照した.
海音寺潮五郎訳 (1990) 詩経. 東京, 中央公論社, pp.352-353.
- 18) 平川祐弘 (2006) 和魂洋才の系譜 内と外からの明治日本 上. 東京, 平凡社, pp.48-49.
- 19) ここでいう, 「勝利至上主義」という用語については, 「勝利がスポーツの本質であることではなく, スポーツ以外の価値を手に入れる過程で勝利を唯一の目的として振舞うこと」 (関根, 2013, p.38) という関根の定義に依拠している. 関根によると, 「スポーツの勝利よりも金銭や名誉などが『スポーツを通じて』の至上価値とみなされるとき」 (関根, 2013, p.38) に「勝利至上主義」が姿を現すという. 本稿で, 「勝利至上主義」という言葉を使用する場合は, 特に断りがない限り関根の定義に依拠することにする.
関根正美 (2013) 体罰の温床・勝利至上主義とフェアプレイの狭間. 体育科教育. 61 (11), 38-41.
- 20) 武田 (1925a) 前掲書, p.15.
- 21) 大阪市立高等商業学校校友会編 (1925) 前掲書, ページなし; 括弧内引用者.
- 22) 同上書, ページなし.
- 23) 同上書, ページなし.
- 24) 本稿で用いる「教育」という語は, 近代以降に生まれた制度としての「学校」を中心とした「教育」ではなく, より広義の「ヒトに生まれながらには備わっていない能力を身につけさせようとする行為 (作用), またはその結果」 (教育思想史学会編, 2000, p.127) という意味で用いる.
教育思想史学会編 (2000) 教育思想事典. 東京, 勁草書房.
- 25) 武田千代三郎 (1925b) 英米其の他に於ける運動の監督指導. 山陰巡回講演記念 大正14年度. 坂本幸三編. 大阪, 大阪高等商業学校校友会講演部, pp.1-10.
- 26) 同上論文, p.1.
- 27) 同上論文, p.4.
- 28) 同上論文, p.6.
- 29) 同上論文, p.6.
- 30) 同上論文, p.3.
- 31) 同上論文, p.3.
- 32) 同上論文, p.5.
- 33) 同上論文, p.8.
- 34) 同上論文, p.8.
- 35) 同上論文, p.8.
- 36) 同上論文, pp.8-9. 傍点は筆者による.
- 37) 友添秀則 (1993) 柔道とJUDOのあいだ. スポーツ文化論シリーズ3. 中村敏雄編. 東京, 創文企画, p.170.
- 38) 同上論文, p.170.
- 39) 武田 (1925b) 前掲論文, p.9.
- 40) 同上論文, p.9.
- 41) 中村敏雄 (1995) スポーツ・ルール学への序章. 東京, 大修館書店, p.95.
- 42) 中村敏雄 (1981) 前掲書, p.191.
- 43) 武田千代三郎 (1920) 運動家. 商海. 52,

- 1-5.
- ⁴⁴⁾ 同上論文, p.4.
- ⁴⁵⁾ 同上論文, p.1.
- ⁴⁶⁾ 同上論文, p.1.
- ⁴⁷⁾ 同上論文, pp.1-2.
- ⁴⁸⁾ 同上論文, pp.2-3.
- ⁴⁹⁾ 同上論文, p.3.
- ⁵⁰⁾ 同上論文, pp.3-4.
- ⁵¹⁾ 同上論文, p.4.
- ⁵²⁾ 同上論文, pp.4-5.
- ⁵³⁾ 谷山良一 (1922) アマチュア運動家に関する一私見. 商海. 57, 29-34.
- ⁵⁴⁾ 谷山は、『大阪市立高等商業学校一覧. 大正十四年一月』によると, 1923 (大正 12) 年に卒業している. また, 彼は「陸上部」に所属していた.
大阪市立高等商業学校 (1925) 大阪市立高等商業学校一覧. 大正十四年一月. 大阪, 大阪市立高等商業学校.
- ⁵⁵⁾ 筆者の管見の限り, 武田が大阪高商校長を務めた 1918 (大正 7) 年から 1928 (昭和 3) 年の間に刊行された『商海』誌上において, 武田のスポーツ論を直接のテーマとした論稿は, 谷山 (1922) のみであった.
- ⁵⁶⁾ 谷山 (1922) 前掲論文, p.28.
- ⁵⁷⁾ 同上論文, p.30.
- ⁵⁸⁾ 同上論文, p.30.
- ⁵⁹⁾ 同上論文, p.31.
- ⁶⁰⁾ 同上論文, p.33.
- ⁶¹⁾ 選手資格を失った選手の割合については資料の制約上算出できなかった. しかしながら, 1922 (大正 11) 年に刊行された『商海』には, 例年掲載されていた「野球部報」が掲載されていなかったため, 野球部の活動が禁止されていた可能性が示唆される. 本稿はあくまでも大阪高商生自身が武田によって制定された「内規」をいかに解釈したのかを明らかにしていくことが目的であるため, 具体的な数値の検討よりも, 谷山自身が選手資格を失う学生が多いために運動部の活動が制限されてしまっていると感じていた, という事実をより重視した.

受付 2015 年 10 月 19 日

受理 2016 年 3 月 12 日